

Contents

<2022年5月例会> 音楽療法の現在と未来～多様な実践・国家資格化について～ — 1	「現在進行形の新興感染症COVID-19 ～緊急・オミクロン株と展望、試される 国際社会の連携～」 — 4
<2022年度通常総会> 退任の七野俊明・前監事「協会は私にとって大きな心の糧」 — 2	<医論異論その10> 独裁国家を新たな国際的枠組みへ — 6
会長挨拶、2022年度役員一覧 — 3	書評プラス — 7
<2022年3月 西日本支部共催> オンラインで結ぶ日英公開シンポジウム2022	冗句茶論、新入会員紹介 — 8

●2022年5月例会 音楽療法の現在と未来 ～多様な実践・国家資格化について～ 二俣泉さん(日本音楽療法学会副理事長、昭和音楽大学教授)

報告・三浦直美

日本音楽療法学会の二俣泉副理事長による講演が5月13日、オンライン配信で行われた。幅広い領域にまたがる音楽療法の現状と国家資格化の動きについて、事例も交えて分かりやすく伝えていただいた。もともと2年前に予定され、コロナ禍によって延期になっていた講演。時間が経っても陳腐化しない内容であったのはありがたいとはいえ、ある意味もどかしもある。というのは、国内ではいまだ音楽療法が十分理解されず、普及していない状況が続いているからだ。

●音楽療法に必要な5条件

二俣氏は、音楽は魔術や宗教と結びついて古代より健康回復のために使われていたとしたうえで、20世紀半ばより医学・心理学などの科学的知見を踏まえて発展してきたのが、現代の音楽療法であると説明した。すなわち、①教育・訓練を受けた有資格者(音楽療法士)が②治療・支援が必要な対象に③目的をもって④計画的に⑤音楽を使用する—という5条件を満たすものであり、自分で好きなCDを聴いて癒されるといったものは正式な音楽療法と呼ばない。②

の対象者は、新生児から高齢者・終末期まで実にさまざまである。⑤については、対象者が音楽体験をするということであり、聴く、歌う、楽器を演奏する、即興をする、身体を動かす、作曲する—などの体験の種類を対象者のニーズに応じて選択する。

こうした内容については、現在修士2年の筆者も学部2年のときに授業で聴き、それまでほんやりとつかみどころのなかった音楽療法の輪郭が見えてきて、他人に説明できるようになってきたものだった。とはいえ、理屈だけではやはりイメージしづらい。そこで、二俣氏は対象となる代表的な疾患・障害ごとに、実際の様子を動画で紹介しながら説明した。

●ASD・知的障害など、音楽で

コミュニケーション改善

まずは、自閉スペクトラム症の子どもである。コクラン・ライブラリーによると、音楽療法はプラセボもしくは標準治療と比べて社会的な相互作用、非言語的および言語的コミュニケーションスキル、働きかけ行動および社会・情動的相互性の点で優れていたという。動画では、オースト



▲二俣泉さん

二俣泉(ふたまたいずみ)さん

1989年 国立音楽大学器楽学科卒業、同大学院(音楽教育学)、筑波大学大学院(障害児教育)修了。96年 ノード・ロビンズ音楽療法オーストラリア卒業。日本大学芸術学部音楽学科助手、東邦音楽大学准教授等を経て、2022年から昭和音楽大学音楽芸術運営学科音楽療法コース教授。著書に「音楽療法を知る—その理論と技法—」(共編著、杏林書院)、「音楽療法曲集・静かな森の大きな木」(共編著、春秋社)などがある。

リアの自閉スペクトラム症児の事例を紹介。最初はコミュニケーションを取ることが難しかったのが、音楽を介してセラピストとの交流が生まれ、そのなかでいくつかの言葉とコミュニケーション能力を獲得し、小学校に入学するまでが描かれていた。

効果の理論的背景として、コミュニケーション能力の発達はレンガ積みのようなもので、土台となる能力が不十分では上層の能力が獲得できないとし、抜けている能力を教育・訓練でつくり出すために言葉以外のコミュニケーション手段として音楽が必要なのだという。

次に、知的障害の事例。特別支援クラスを卒業し地域での就労への移行期にある青年らを対象に、彼らを精神的に支え社会性を促進することを目的とした音楽療法のアメリカでの実践例を示した。この中で使われていた音楽は、年齢相応の少し大人っぽいものだ。青年らは、簡単な楽器操作で充実した音楽体験ができるよう工夫された合奏を楽しんでいた。

●認知症BPSD改善に効果

続いて高齢者のケースでは、認知症のBPSD（心理行動症状）などに対する効果を紹介。エビデンスレベルは高くないものの、音楽療法是BPSDに対する非薬物療法のひとつとして診療ガイドラインにも掲載されている。認知症が進み言葉によるコミュニケーションが難しくなった人とも、言語を介さずコミュニケーションが取れるということが、効果の背景

にある。BPSDは介護が困難になる最大の要因であり、介護うつ、介護殺人など社会的悲劇も生む。高齢化で認知症患者が今後ますます増えるなか、非常に重要であり、音楽療法をもっと活用してほしいと願う領域である。

緩和ケア領域の音楽療法については、実例を含めて紹介したテレビ番組の映像を提示した。数値やエビデンスで効果が示しにくい分野だけに、実際の映像が語るものは大きい。また、精神疾患（統合失調症）については、引きこもり、無関心など陰性症状への対応として歴史・成果があるとしたうえで、とある精神科医兼音楽療法士の実践例を示した。

●「音楽療法士」国家資格に 立ちほだかる壁

最後に、音楽療法士の国家資格化の動向について説明した。日本音楽療法学会は2001年の発足時より国家資格化を目指している。03～04年には法案要項を策定、国会上程の寸前まで行ったものの、「学会内に意見の不一致がある」として頓挫した。その後、政権交代などもあってしばらく動かなかったが、2017年から公明党を中心に新たな動きが進んでいる。なかなかデリケートな話

題だが、「音楽療法士」という名称での国家資格化は難しいことなど、現段階での議論の状況を丁寧に伝えた。

質疑応答では、「国によって音楽療法の考え方は違うのか」「『音楽療法学』として体系化されているのか」といった概念に関する質問や、「音楽療法士に対する拠出、報酬はどうなっているか」「音楽療法を取り入れている病院を探すには」といった具体的な質問など多数寄せられた。

音楽療法の考え方は国ごとに発展の経緯・歴史によって異なり、北欧ではコミュニティ中心、ドイツは心理療法的、アメリカはそれらを含めて多様—といった特徴がある。各国から学んだ日本でも実に多様で、集団歌唱療法といった日本独自のスタイルもある。その多様性は、日本で音楽療法の理解・普及が進まない一因だと思う。比喻を多用し、説明上手な二俣氏にならない、筆者も実践だけでなく「伝えること」「語ること」にもしっかり取り組まねばと考えている。

(みうらなおみ=ジャーナリスト、認定音楽療法士、元時事通信編集委員)

●2022年度通常総会 退任の七野俊明・前監事 「協会は私にとって大きな心の糧」

報告・村上和巳

日本医学ジャーナリスト協会の2022年度通常総会が5月23日、日本記者クラブ（東京・内幸町）の会場を起点にオンライン形式で開催されました=写真。20年の新型コロナ・パンデミック以降、総会はオンラインで開催されるようになり、正副会長と担当理事・監事、幹事有志の配信スタッフが会場に集まって実施してきました。今回は緊急事態宣言やまん延防止等重点措置の発令がなかったこ

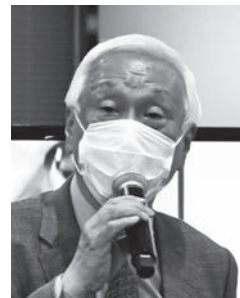


ともあり、理事の一部による会場参加が実現しました。

総会は午後7時からスタート。正会員の3分の1以上に当たる117人（委任状・表決権行使書を含む）の出席を得て、理事で広報・会報委員長の渡部新太郎氏が司会を担当し、浅井文和会長のあいさつの後、「21年度事業」と「21年度財務」の報告（議案1、2）が行われ、いずれも承認されました。引き続いて議案3「22年度役員人事（案）」、議案4「22年度事業計画（案）」、議案5「予算計画（案）」も承認されました。

最後に前期で監事を退任した七野俊明氏が「大野善三会長時代にお声がけをいただき、幹事、理事、監事と務めさせていただき、我ながらこんなに長く続けるとは思ってもみませんでした。その間、役員や会員の皆さんなど様々な方々と知り合うことができました」と挨拶し、「先日もしっかり振り返ってみましたのですが、協会の存在は私自身にとって大きな心の糧になったのではないかと思います」と思いを語りました。七野氏は今後とも会員として協会に参加していただけるとのことです。

最後の会員からの告知では、オンライン参加した理事の大熊由紀子氏が21年度の協会賞受賞作品のうち2



▲退任の七野俊明・前監事

作品の書籍化をチャット欄経由で報告しました。総会全体は42分で終了し、円滑な進行となりました。

（むらかみ・かずみ=事務局長）

■ 通常総会 会長挨拶 浅井文和 ■

この2年間、新型コロナウイルス感染症への対応に追われました。協会の活動を止めない決意で、オンラインで月例会やシンポジウムを開催してきました。感染症について正確で多面的な報道をするために、多彩な専門家を講師にお招きしました。月例会によっては100名以上の方に参加していただいたり、通信社の記事になったりと大きな反響がありました。

協会賞は昨年、第10回を迎え、優れた医学・医療記事を讃える催しとして定着してきたと思います。昨年は京都新聞、一昨年は中日新聞が大賞を受賞しました。東京にいと目にとまりにくい地方紙・ブロック紙の記事を多くの方にご紹介できました。

昨年の総会で私は「会員相互の交流の場を作る」と申し上げました。昨年夏からオンライン会員懇親会を開催

しております。今年度も交流の場を充実させたいと思います。

理事会では協会の事業全体を見直し、中期計画を作ることを検討しております。会員の皆様がどのような活動を求めておられるのか、ご意見をうかがいたく存じます。

今後とも会員の皆様には活動への積極的なご参加をよろしく願います。

2022年度 役員一覧

[理事]

浅井 文和 <会長>

医学文筆家、元朝日新聞編集委員

大熊由紀子

国際医療福祉大学大学院教授、
ジャーナリスト、元朝日新聞論説委員

木村 良一

ジャーナリスト・作家、
元産経新聞論説委員

高田 薫

フリーアナウンサー、日本語教師

辻田 邦彦

(株)トークス代表取締役社長

藤野 博史

フジノ・オフィス代表、
医療ジャーナリスト、元読売新聞記者

松井 宏夫 <副会長>

医療ジャーナリスト、
日本肥満症予防協会理事

村上 和巳 <事務局長>

フリージャーナリスト

村上紀美子

医療ジャーナリスト

渡部新太郎

(株)日本医学出版
ヘルスケアアカデミー代表取締役

[監事]

矢野 充彦

一般社団法人国際CCO交流研究所

[名誉会長]

牧野 賢治

科学ジャーナリスト、
元毎日新聞編集委員

伊藤 正治

医学ジャーナリスト、元共同通信

水巻 中正

国際医療福祉大学名誉教授、
元読売新聞社会保障部長

●2022年3月 西日本支部共催

オンラインで結ぶ日英公開シンポジウム2022

「現在進行形の新興感染症COVID-19

～緊急・オミクロン株と展望、試される国際社会の連携～」

基調講演： ジョン・エドモンズさん
押谷仁さん

講演： キム・マルホランドさん
今中雄一さん
リア・サヨさん

ラウンド・テーブル： 座長＝ シュンメイ・ユンさん
ディスカッション 有吉 紅也さん

参加者＝ ジョン・エドモンズさん、押谷仁さん、キム・マルホランドさん、
今中雄一さん、リア・サヨさん

ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院教授
東北大学大学院医学系研究科微生物学分野教授
メルボルン大学教授
京都大学大学院医療経済学分野教授
フィリピン国立感染症専門病院・サンラザロ病院医師
ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院教授
長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科教授

報告・竹野内崇宏

長崎大学主催、日本医学ジャーナリスト協会西日本支部（藤野博史支部長）共催の日英公開シンポジウムが3月6日、福岡市のエルガーラホールを発信会場に英ロンドン、豪メルボルン、比マニラ、東京、仙台、京都を結んで開催された。各国の最前線で治療、研究、政策にあたる医師たちが率直な意見を交わし、同

時通訳を通じて日本語で593人、英語で203人が聞き入った。新型コロナパンデミックの変遷と収束を考えるうえで大きなヒントに満ちた3時間となった。

●2年前とは違う。

困難も希望も新たなステージだ

「私たちは2年前とは根本的に異なっ

た状態に立っている」。昨年3月のシンポジウムに続く登壇となったロンドン大学のジョン・エドモンズ教授のこの言葉が、強く印象に残った。各国とも新型コロナの変異ウイルス、オミクロン株による大波に見舞われながらも、パンデミック初期に後戻りせず、経済や教育、社会的公平性の議論を進められるステージにたどり着



機材を駆使し、世界を結ぶ発信会場（福岡市中央区天神のエルガーラホール）

けたことを多くの聴講者が実感したのではないかと。ワクチンの威力も再認識することになった。

●英国は早期のワクチン開始で 成功し、日本は3密を広めた

基調講演は「日本で、そして世界で何が起きているかを検証する」がテーマだった。英国については、緊急時科学諮問員を務めるエドモンズ氏が、日本の6倍以上となる16万人の死者を出した2年間の英政府対応を検証した。当初、検査体制や隔離の不十分さで院内感染が多発したことを反省する一方、早急なワクチン接種開始によって重症者が激減した点に触れて「科学的な成功を達成できた」と自信を見せた。

日本側は政府の対策分科会委員を務める東北大学の押谷仁教授が講演し、G7内でも死者数を抑えられていることを背景に、クラスター解析によって新型コロナ特有のリスクを早急に発見してメッセージ化に結び付けたことを挙げ、「子どもですら3密（密閉・密集・密接）という言葉を知るようになった」と説明した。オミクロン株の流行後も「季節性インフルエンザより高い致死率を下げる努力が課題だ」とも語った。

●ワクチン開発は「A」だが、 分配は「D」

続いて3カ国の専門家による講演があった。メルボルン大学のキム・マルホランド教授はWHO（世界保健機関）コロナワクチン諮問委員の立場から発表した。早い時点で各国からワクチンが開発される状況を「A++」と評価しながら、ワクチンの分配については「D」「プア」と厳しい評価を下した。「アフリカではほとんど接種が進んでいない国がある」と指摘した。

京都大学の今中雄一教授は日本国内の医療・経済に関わるデータを比較した。「コロナ禍でアルコール関連の肝疾患や膵炎の入院患者が増え、家計のアルコール消費額が実際に増加している。

コロナ患者が入院する病院では、認知症患者の身体拘束が増える傾向もみられた」と説明した。そのうえで今中氏は「ひとりも取り残さないよう、（精神保健も含む）医療、経済、社会全体を把握する科学が必要だ」と訴えた。

フィリピン国立感染症専門病院・サンラザロ病院のリア・サヨ医師は、同国の重症治療の最前線について報告した。2021年でも大人の致死率が20%、子どもで10%に上り、「結核やエイズを併発していることも多い」と紹介し、病院職員の感染が多く、感染者の5～6人に1人は再感染も経験していることも明かした。

●出口までは長く、 アップ&ダウンが続く

各国の報告を踏まえたラウンド・テーブル・ディスカッションは、ロンドン大学のシュンメイ・ユン教授と長崎大学の有吉紅也教授が座長を務めた。

有吉氏は「多くの人たちが、パンデミックがいつ終わるのかを聞きたいと思っている。出口はいつになるのか」と話題を提起した。

押谷氏は「おそらく長くかかる。アップ&ダウンの凸凹道が続く」と厳しい見通しを示し、「オミクロン株がどう始まったかも分かっていない」として「感染者が



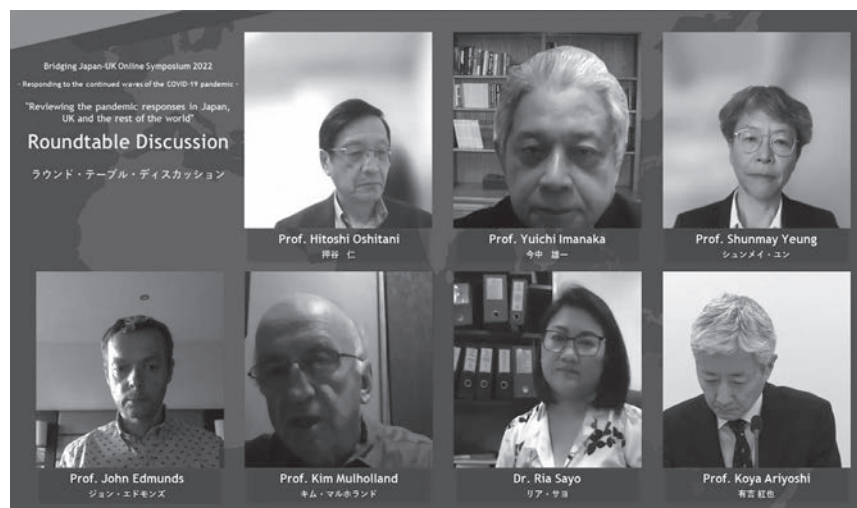
世界各地からの発言に耳を傾ける有吉紅也氏

重篤になる新たな変異株の出現の恐れはなお高い」と警告した。

エドモンズ氏も「オミクロン株のようにウイルスはどんどん進化する」と脅威を認めたとうえで、「2年前は世界全体が脆弱だったが、ワクチンや感染によって免疫がついてきた。2年前とは違う状況になっている」と強調した。

一方、マルホランド氏は免疫の持続性や減弱（waning immunity）が重要な研究分野になっていることを紹介した。「変異株に広く対応できるワクチンが出てくればいいとは思いますが、おそらくウイルスは生き延び、問題は長く続くだろう」との見通しを語った。

次のパンデミックに向けた国際協調と、格差是正の重要性も再確認された。押谷氏は、SARS（サーズ）やMERS（マーズ）の出現、2009年の新型インフルエンザの発生があったにもかかわらず、「パンデミックへの備えを十分に



オンラインのディスカッションも充実した。上左から押谷仁氏、今中雄一氏、シュンメイ・ユン氏、下左からジョン・エドモンズ氏、キム・マルホランド氏、リア・サヨ氏、有吉紅也氏



共催し、シンポジウム最後に謝辞を述べた
藤野博史・西日本支部長

いた国はなかったと言えるだろう」と指摘し、自身も職務経験のあるWHOに対し、「残念だが、期待通りの機能を果たせていなかった」と話した。

マルホランド氏も「ジュネーブ（WHO）は最善を尽くしているが、リソースに限界がある」と述べ、「WHOの弱体化はだれにとっても困る。国際的な支援が必要だ」と訴えた。シュンメイ・ユン氏は「イギリスでも通信デバイスによる遠隔教育

では、家庭の経済状況で生まれる格差の問題が生じている」と説明した。今中氏は「コロナは格差など社会の様々な欠陥をあぶり出した。パンデミックをより良い社会への奇貨とする必要がある」と求めた。

（たけのうち・たかひろ=朝日新聞記者、西日本支部常任幹事）

新型コロナの第6波の感染が落ち着いてきたと思ったら、中国が上海をロックダウン（都市封鎖）し、北朝鮮が感染を初めて明らかにした。中国は1人でも感染者が出たら厳しい規制をかけるゼロコロナ政策に固執し、中国の社会・経済活動だけでなく、世界経済にも深刻な影響を与えている。北朝鮮に対しては、感染爆発で新たな変異株が生まれ、それが世界中に広まる危険性が指摘されている。

5月12日、北朝鮮の朝鮮中央通信が「平壤で採取された検体から変異ウイルスのオミクロン株が検出された。国内で初めての感染者の確認だ」と伝えた。なぜ突然、感染を公表したのか。金正恩（キム・ジョンウン）総書記は急激な感染拡大に対し、これまでの「感染者ゼロ表明」では治安の維持に効果がないと判断したのだろう。それゆえ、公表直後に朝鮮人民軍（軍隊）を投入して防疫に尽力していることをアピールし、国民の不安解消に躍りとなった。

公表から1カ月後には発熱者の割合が国民の6人に1人（計440万人）を記録した。それでも韓国の医療支援や国際的枠組みのCOVAX（コバックス）のワクチン提供を拒絶している。対外的には支援を受けることで核・ミサイル開発の中止を求められ、国内的には金正恩政権の感染対策の失敗を認めることになるからだ。

一方、中国最大の経済都市の上海では3月28日に東部が、4月1日には西部も閉鎖された。ロックダウンが解除されたのが、2カ月後の6月1日だった。この間、上海市民は不自由な生活に苦し

められ、言論統制を受けながらもSNSを使って抗議や怒りの声をあらわにした。世界で初めて感染爆発を起こしたのが武漢市だったが、2020年1月23日から4月7日までの76日間にわたって封鎖され、このときも情報が厳しく制限された。



独裁国家を新たな国際的枠組みへ

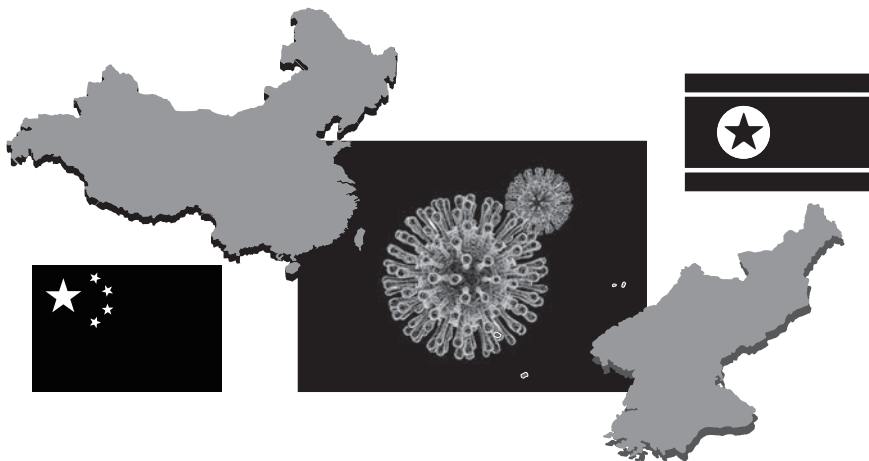
木村良一
（元新聞記者）

中国はなぜ、ゼロコロナ政策にこだわるのか。習近平（シー・チンピン）国家

主席（党総書記）は武漢市の封鎖を例に挙げ、「中国は封じ込めに成功した」と誇ってきただけに、いまさらゼロコロナ政策を止めることができないのだ。

しかし、感染力の強いオミクロン株の封じ込めは難しい。ゼロコロナ政策の効果は薄く、社会・経済活動に与える弊害の方が大きい。WHO（世界保健機関）も「ゼロコロナは持続可能ではなく、方針転換が求められる」と批判している。新型コロナウイルスが中国で生まれたとの疑惑も消えていない。国民を感染から守って安全な生活を提供するのが、感染症対策である。にもかかわらず、中国では国民生活よりも党と国家の繁栄が優先される。非人道的で、極めて理不尽である。

感染症のパンデミック（世界的流行）対策として、専制・覇権主義の独裁国家にどう対応すればいいのか。対応がまずいと、私たちに大きな被害が跳ね返ってくる。中国然り、北朝鮮然り。国連の安全保障理事会などとは別に防疫上の新たな国際的枠組みを構築し、そこに独裁国家を組み入れる必要がある。





なにか変だよシリーズ
「地域包括システム」、「電子カルテ」、
「診療報酬」
全3巻 著者 長英一郎ほか
(各巻Amazon Kindle版1,000円～、
ペーパーバック版1,540円～ 税込)

東日本税理士法人所長の長英一郎氏が、氏の主宰するオンラインサロンメンバーによる座談会をまとめた「なにか変だよ」シリーズを出版している。第一弾が『なにか変だよ!地域包括ケアシステム』、第二弾が『なにか変だよ!電子カルテ』、第三弾が『なにか変だよ!診療報酬』である。重要ではあるが、どこか「おかしいな」と思わせるテーマについて論じているシリーズである。

例えば、実務者らが参加して、事例も多く挙げながら、今、言われている「地域包括システム」って、何か変、どうしたら良いのか、を自由に、かつ縦横無尽に意見を交わしている。こんな取り組みがある、行政の役割は、ここを何とかしない、まちづくりを考えないといけないね、など、面白く、なるほどと腹落ちする議論が満載となっている。

電子カルテに関しては、例えば、保守費用についての不透明さが議論される。ランサムウェアなどの脅威があって、セキュリティの問題も大きくなっているわけだが、何を買ったか分からないまま、言われるがままの保守料を支払わされる感が「なにか変だよ」というわけだ。診療報酬に至っては、そもそもの在り方が「なにか変だよ」と議論されている。患者の視点で設計されているのか、点数ばかりに目が行く経営行動をもたらず結果になっているのではないかと「ここまで

言って良いのか」と思わせるような内容になっている。取り上げられたテーマにかかわらず、地域医療の現場で、特にコロナ禍、withコロナで苦闘する多くの関係者にヒントとなることがいっぱい詰まっている。

評者も実は「地域包括ケアシステム」と「診療報酬」については議論に参加している。いろいろな立場で医療現場に関わり、苦闘し、どうすれば「魂」を入れることができるのか、実践、意見を聴き、評者も知るところの事例、評価などを紹介し、前向きに議論を重ねた。評者以外の議論参加者も「なにか変だよ」をさまざまに捉え、それぞれの立場から発言している。それらを読んでいただければ、何が足りないのか、何を考え行動すれば良いのかが伝わってくるのではないだろうか。

一貫するのは患者視点であり、現場視点である。医療現場が何をニーズとしているのか、を知って理解し、それに沿った課題解決策を考えていく一助になる3冊である。

(松村眞吾
(株)メディサイト代表取締役)

新入会員が勧める一作



『分水嶺
ドキュメント コロナ対策専門家会議』
河合香織 著
岩波書店 (1,980円 税込)

分水嶺の帯には「そして専門家たちは前のめりになってルビコン川を渡った」とある。しかし私には、公衆衛生という領域はそもそもルビコン川を渡ることが前提であるように思える。

大学院で最初に習ったのは、公衆衛生とは極めて実践的な学問であるということだった。PR会社勤務の後、公衆衛生を学ぶために進学し、この本を読んだのは学生生活が5カ月を過ぎた頃だった。本を読むことで授業での学びと現実が繋がりに、またその背景が理解できたことで、パズルのピースが埋まっていくような高揚感を覚えた。

授業で教授がこんな話をしていた。「そのボタンは本当に押すべきボタン

か。そのボタンを押すことは現場に不利益をもたらさないか」。分水嶺ではまさに、専門家がどのボタンを押すべきかに悩み、葛藤し、決断していった様子が描かれている。

<推薦者プロフィール>

十数年のPR会社勤務の後、ヘルスコミュニケーションを学ぶために東京大学大学院医学系研究科公共健康医学専攻に進学。現在は自身の研究の他、国立がん研究センターでインターンとして研究に携わる。

長澤知魅
(ながさわともみ/東京大学大学院生)

冗句茶論

(ジョーク・サロン)

松井寿一

寅年になってもみんなマスクをしたままである。タイガーマスク。

ビールはのどごしというが、噛ん(缶)で飲んでる。

ある魚を叮嚀にいうと奉行所になってしまう。おしらす。

四文字の食べ物の名前の上をとると卵の花となる。塩辛。

花とカメラの名前の楽器。バラライカ。

間延びした顔は島に咲いている蘭の花である。しまらん。

島に住んでいる人は冬眠(島民)。

現役の幕の内力士の中でマメな人は？遠藤マメ。

鳥の中で一番誇り高いのは鶏である。プライドチキン。

死んだ人から電話がかかってきた。シガイ電話。

出張中の山梨県から自宅へ電話をかけた。コウシュウ電話。

山梨県の名産品の一つにアワビの甘煮がある。海がないのに、というとかイの国。

山梨県と香川県の人共同事業をするので融資を頼んだが、貸してくれなかった。甲斐讃岐だから。

楽屋で壺家の師匠が「上着をとってくれ」といったら、弟子が鰻を注文してしまった。

普段着のままパリへ行ってくるといった師匠がいた。よくよく聞いたらハリだった。

フランスへ渡米したといった人がいる。渡仏というんだと教えたら、イギリスは？と聞く。渡英だといったら地下鉄で行けるんだ。

またアメリカへ行きたくなくなったというのでてっきり行ったことがあるのかと思ったら、前にも行きたいと思ったのだという。

なんでも欲しがると子供は乾燥した果物である。ほしがり。

子供が毎日読む数字は？暦(子読み)。

冷蔵庫に入っている料理は、和、洋、中のどれか。中である。冷やし中か。

機内サービスで飲み物を持ってきてくれたがマスクをしているので声がよく聞こえない。マスクを外してくれといたら「お客さま、イヤホンを外して下さい」。

大相撲のテレビ中継は海外にも。力士はスモウレスラー、横綱はグランドチャンピオン、大関はワンカップ。

密はいけないと劇場は座席を一つ置きに空けた。誰もいないのに「相手いる」。

何を食べてもいい席がある。空(食う)席。

● 毎号、お楽しみいただいていた松井寿一さんの「冗句茶論(ジョーク・サロン)」は、今号で掲載を終了いたします。通巻39号(2003年7月発行)から20年余にわたり、ご執筆いただきました。厚く御礼申し上げます。なお、次号に松井寿一さんにこれまでの思い出話などをまとめていただき、掲載を予定しています。

2022年度新入会員のご紹介

(敬称略、順不同、希望された方のみ掲載)

入会月	氏名	所属
2022年4月	山田 郁子	フリー(編集記者)、子育て世代の課題解決・活動に取り組む『tsu.wa.ru』代表
2022年4月	滝 順一	日本経済新聞 編集 総合解説センター 特任編集委員
2022年4月	井艸 恵美	東洋経済新報社 記者

事務局便り

● 企画委員会が開催されました

新型コロナウイルス感染症パンデミックが始まって2年半超。昨年末までは目まぐるしく状況が変化しました。企画委員会が中心となって開催する講演会も、この状況に合わせねばならず、今年初めまでは2020年秋に開催した委員会での提案や理事などからの随時推薦があった講師候補を軸に開催してきました。

今春から状況が落ち着いてきたこともあり、コロナ禍当初に開催が決まりながら、無期限延期のままになっていた講師の先生方に改めて開催をお願いし、ようやく実施にこぎつけました。

そこで6月末に久しぶりに委員会を開催し、改めて委員会の位置づけや今後の開催方針などを議論しました。これらを踏まえて現在、秋以降の開催を準備しています。あとは開催の障害になりそうな第7波が小規模で収まるのを願うのみです。

● 協会ホームページ編集・管理の

お手伝いいただける方を募集中

すでにMEJA通信でも告知いたしましたが、協会の最新情報を提供しているホームページの制作をお手伝いいただける会員ボランティアを募集中です。条件はWixエディタでの制作経験がある方。お手伝いしていただ

る方には広報・会報委員会に所属していただきます。「お手伝いできます」という方は、事務局までぜひご連絡ください。(村上和巳)

Medical Journalist Vol.37 No.2 通巻94号

発行日: 2022年8月1日
発行: NPO日本医学ジャーナリスト協会
発行者: 浅井文和
編集責任: 木村良一
事務局: 東京都港区麻布台1-8-10 麻布備成ビル7階
(株)コスモ・ピーアール内
TEL03-5561-2930 FAX03-5561-2912
E-mail: info@mejaj.org
ウェブサイト: <https://www.mejaj.org/>